

中学校体育授業における教師の実態把握に関する研究

松田 一輝 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究では、現職の中学校保健体育教師と中学校の実習を経験した大学生を対象に質問紙調査を行い、中学校において保健体育科の授業を実施する際に、いかにして生徒の実態を把握しているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者 現職の中学校保健体育教師 29 名、中学校での教育実習を経験した「大学教育学部 3 年生 26 名
- 2) 調査方法 体育授業における生徒の実態把握の視点や行い方についての質問項目 (4 件法及び選択技法) 及び自由回答法から構成した質問紙を用いた質問紙調査法
- 3) 分析方法 因子分析 (主因子法・Promax 斜交回転) および対象者の属性による意識の比較 (分散分析、t 検定)

3. 結果と考察

- 1) 因子分析の結果、中学校体育授業における教師の実態把握の視点は、「技能レベル」「生徒の欲求」「学習効果」の 3 因子から構成された。それぞれ、教職歴や性別、担任の有無によりそれぞれ違いが見られた。
- 2) 実習生は教師より生徒の「技能レベル」を重要視していることが明らかになった。このことから、現職教師は実習生より生徒の欲求や学習効果に着目して授業を展開していることが推察できる。
- 3) 担任を持っている教師よりも担任を持っていない教師の平均値が「生徒の欲求」「学習効果」因子において有意に高かったことから、担任を持っていない教師は、自分の担当するクラスが無く、固定された生徒との関わりの場面が担任を持っている教師より少ないため、日常的な会話の中で把握できそうな生徒の授業に対する思い等について、日頃から積極的に実態把握を図っていることが推察さ

れる。

- 4) 女性教師は男性教師より、「生徒の欲求」「学習効果」について重要視している傾向があることが分かった。このことから、男性教師より女性教師の方が、生徒の授業に対する思いや生徒の理解力等を把握しようとしていることが推察される。
- 5) 生徒理解において最も重要視していることについての自由記述のカテゴリー分けの結果から、授業内での実態把握の視点は 3 因子と関連づけることができた。また、授業外での実態把握の視点は、「生徒の興味・関心」「生徒の思考・行動」「生徒の性格」「人間関係」「家庭環境」「体調」の 6 つにカテゴリー分けすることができた。加えて、多角的に生徒と関わることでその生徒の背景と共に、総合的に生徒を理解しようとしている教師の実態把握の実情が推察された。

4. 結論

本研究では、教師の実態把握は授業内、授業外共に行われていること、生徒との会話や観察だけでなく、他の教職員および実習生との会話や学習カード等、多様な場面や方法を用いて行われていることが明らかになった。これらの結果から、教師は授業を行う上で、多角的な視点から生徒の実態を把握しているといえる。また、性差等、教師によって重きを置いている視点にも違いが見られたことから、中学校体育授業において教師が行う実態把握は、一律の視点や方法で成り立つわけではないことが明らかになった。加えて、現職教師と実習生との間に意識の差が見られることから、実習生が「生徒の実態を把握する方法」を、現職教師から学ぶことが重要であることが示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) 下地芳文・吉崎静夫 授業過程における教師の生徒理解に関する研究、日本教育工学雑誌、14(1)、p43-53、1990